旅する女

南風　こまち

幕間3〜4　　ひび割れを継ぐ

＊碓氷瑞穂――秋田市・鴨宮眼鏡店

　気の早い台風が過ぎ去り、よく晴れた夏がやってきた。礼士さんが巻き込まれた事件から帰郷した翌日、私は彼に連れられて眼鏡を新調しに眼鏡店を訪れた。
　眼鏡なんてすぐに決まるだろう。そう高を括っていたのだけれど、フレーム選びで意外に難航することになった。
「うーん……瑞穂さん、何かこれがいいとかないんですか？」
　未だに下の名前で呼ぶのは気恥ずかしい。剱さん……いや、もうそんな他人行儀な呼び方はしなくていいのか。礼士さんと二人きりで出かける、とどのつまりデートは今日が初めてだ。まさか最初の行先が眼鏡屋になるとは思わなかったけれど、悪くない。
「瑞穂さん？」
「えっ？　あ、ごめんなさい、少しぼんやりしてしまって」
　胸の内を誤魔化すように、どれにしようかなと机に所狭しと陳列された眼鏡を見て回る。前までは黒い細縁の眼鏡だったけれど、東京駅でフレームごとぐっしゃりと壊れてしまった。
　とりあえず選んでみたのは縁なしの楕円眼鏡で、つるの部分は深い赤色に染められている。そっとかけてみて、鏡を覗き込む。頭に巻いた包帯も相まって、ぱっと見では目元から血を流しているように見えなくもない。
「つ……礼士さん、どう思います？」
「そんな硬くならなくてもいいですよ」
　礼士さんは軽く微笑みながら鏡を覗き込む。
「色合い的に血色は良く見えそうですけどね」
「礼士さんだって口調が硬いですよ」
「え？　あれ、本当だ。これは一本取られたな」
　少しおどけた口ぶりに私は思わずけらけらと笑った。
「でも、瑞穂さんは肌の色が少し濃いめだから寒色系の方が合うかもね。これなんかどう？」
　互いに敬語が抜けて、会話に心地よさが宿り始める。礼士さんが手に取ったのは翡翠色の角縁眼鏡で、フレームはやはり細縁。私に太縁は似合わない、というのは店に入る前から互いの内心で一致していたようだ。
「うーん……」
　鏡の中で翡翠色の眼鏡をかけた私は表情を少し曇らせている。
「思ったよりコレジャナイ感がする感じ？」
　礼士さんがおずおずと聞く。正直あまり合ってはいないけど、それを面と向かって言うのは少し怖くもある。せっかく選んでくれたのだから、無下にはしたくない。
「そんなに気を使わなくてもいいよ。その……恋人同士になったとはいえ他人は他人だし、他人同士だからそういう関係になれるんだから。それに、瑞穂さんは気を使わなくたって……」
　礼士さんはそこから先は言わなかったけれど、彼が隠すように顔を逸らしたのを見た私は、翡翠色のフレームを元の位置に戻した。
　そこから二人でああでもないこうでもないとフレームを探し回った。でも、不思議とこういう時間が一番楽しかったりする。
　陳列棚の前を3周くらいしただろうか、私はふと棚の

中段くらいに埋もれていたフレームを見つけた。青いアンダーリムの角型眼鏡だ。
「青池みたいな色だね」
横から礼士さんが眼鏡と私を見比べる。
「青池？」
「うん。白神山地にある池でね、水底まで深い青が透き通ってとても綺麗なんだよ。夏場は日が長いし、一年のうちでも特に美しく見えるんじゃないかな」
今度行ってみる？　と聞かれてそのまま頷いてしまった。秋田からなら日帰りで行けるらしいけれど、勢いのまま次のデートの行先が決まってしまった。
「ねえ、かけてみてよ」
そういえばまだ手に取ったままだった。私はそっと、青縁眼鏡をかけてみる。鏡の中を見てみると、締まった色合いをした自分の顔があった。
「どう？　礼士さん」
今日初めて、眼鏡をかけて鏡の外を見る。礼士さんは少し驚いたように垂れ目を丸くして、そして少し私に近寄る。
「似合っているよ、瑞穂さん。少し尖った感じはするけど、とても瑞穂さんらしい」
数分後、私は新品の眼鏡をかけながら店を後にした。真新しいピカピカのレンズの向こうには、青空と大きな入道雲。そして、隣を歩くあなた。